

**鶴見精機**

鶴見精機（横浜市鶴見区、立川道彦社長、045・521・5252）は、海洋計測機器の専門メーカー。ダムや湖沼、河川など淡水の調査研究用計測機器システムの設計・製造も手がけ、水産庁や海上保安庁、海洋研究開発機構などに

納めている。海洋計測システム「AXCTD」は海洋研究者が在籍する大学や米航空宇宙局（NASA）向けなどに販売する。今後は、日米だけでなく、アジア、欧州などの国や地域に売り込みをかける。（横浜・高島里沙）

グローバル経営  
**適地生産**  
**適地販売**

# 海洋計測システム拡販

AXCTDの投下準備をするNASA職員



AXCTDは航空機からプローブ（探針）をパラシュートで海に投下し、水深1000mまでの温度や電気伝導度を測定するシステム。船舶からプローブを海に投下して、えい航しながら水温や電気伝導度を測定する「XCTD」の進化版で、高度2万5000m（約7600ft）の上空から投下が可能だ。着水後に海水電池が作動し、外殻は膨張して浮きこ

り、本体のプローブが海中に沈んで自動的に測定を始める。有線でデータをとりながら、海面に浮遊する送信機からデータを航空機に搭載したアンテナへ無線で送りデータを収集する。リアルタイムでの計測が可能だ。AXCTDは2007年に販売を開始し、累計

## アジア・欧州など海外市場開拓

で1000本を販売。NASAとは2016-21年に、1000本以上を納める契約を結んでいる。NASAの研究チームは、氷河が溶ける原因などを調査するため、グリーンランド海域などでAXCTDを使用する。北極では資源探査も進んでいるという。

10年には、インドのデリー近郊のグルガオン（ハリヤナ州）に事務所を開設した。インド洋とベンガル湾は海洋観測者が注目している海域。インドではモンスーンの動向は農業生産のカギを握っており、その研究・観測に海洋計測機器は欠かせない。この海域はまた、日本、中国などにとって、シーレーン上重視すべきところでもある。鶴見精機の海外進出は早く、1981年に米国法人をシアトルに設立した。米国法人は販売と部品調達機能を持つ。現地での部品調達比率は全社の10%強。米国で資材を

## 気候変動・海底資源 研究機運高まる



航空機から投下されたAXCTD

購入し、日本に輸入して国内で生産する体制を敷く。国内拠点は横浜市鶴見区と福島県白河市。XCTDは累計8万本を販売してきた。現在、年間約5600本を生産している。プローブは白河工場で量産する。国内需要はまだ圧倒的に多く、海外販売比率は1割にとどまる。

立川社長は「約10年前から海洋研究の機運が高まっている。それだけにAXCTDに期待を寄せており、需要を見込めるのは（北太平洋の）北洋海域」と定め、同地域での販売にも力を入れる。